『運河と可憐な古都　オランダ・ベルギー８日間』

“真珠の少女は再び微笑んでくれるのであろうか？そしてブルージュの鐘は Ding　Dong～♪と心慰めてくれるのだろうか？“

〔JTB　夢の休日〕

出発　令和６年８月 11 日（日）

帰国　令和６年８月 18 日（日）　　添乗員：M 村 S 世さん

た、たいへんなことになってしまったぁ～Σ(・ω・ノ)ノ！

今回、16 年ぶりにオランダ・ベルギー旅行となったのだがぁ…。オランダの現地日本人ガイドの S さんから、“鹿島さんの HP 見てますよ❣　海外旅行のブログ、旅日記、いろいろ読ませていただきましたぁ。今度の旅行も書いてくださいね！！”

“え～～ッ、こんな場末の歯医者の HP の旅行記をしっかり読んでくれてるんだぁ“という驚きと、さらに、前回のオランダ・ベルギー旅行以外の、長編のイラン旅行とかも目を通してくれたらしい(*_*;

それじゃあ、久々に旅行記を書かなきゃなぁ～^_^;

ということで、帰国後の時差ボケの治りきっていない身体に気合を入れて PC に向かっている。走り書きの読めないメモの解読と、薄れゆく記憶を遡っていく作業は、前期高齢者となった身にはかなり辛い(^^♪

しかし、貴重な体験を文字として残すことによって、旅行の深み・奥行が増して、のちのちにも役立つので何とか頑張ってやり遂げたい！！

前回は、３年に１度行われるブルージュの幻想的な“運河まつり”と隔年開催されるブリュッセルの可憐な“フラワーカーペット”の両方を見るために、そして何より、松田聖子の唄う『ブルージュの鐘』（作詞：松本隆/作曲：細野晴臣）に憧れて訪れたのだが、やっぱり、またあの‘Ding Dong Ding Dong～♫’という美しい鐘の音色に癒されたい！のと、久しぶりに真珠の少女にも逢いたくなったという想いが今回の旅の出発点である。

16 年前は（まだまだ若かったなぁ(‘_’)～）クラツーの『おひとり様限定ツアー』に参加したところ、22 名中僕以外はすべて女性という超ラッキーで、大学４年生～81 歳の方々からとても優しくしていただいたことは忘れられない思い出となっている…81 歳のおばあちゃんに頼まれて、ブルージュでレース屋さんを見て回ったことも懐かしい(笑)

因みに松田聖子の歌には、「マイアミ午前５時」「セイシェルの夕陽」「マンハッタンでブレックファースト」「MAUI」…いろいろと海外の地名が出てくるも

のがあるけど、「ブルージュの鐘」はちょっとマイナーなのかなぁ。聖子ファンで、マイアミやセイシェル等の聖地巡礼をし、海外 130 か国以上を訪れている旅友の M 江さんも知らなかったと話していた。昭和 57 年の秋にリリースされた「Candy」というアルバムに収録されている細野晴臣作曲・松本隆作詞の、僕のなかでは超名曲で、当時、卒業したての新米歯科医であったけれども、ブルージュに行ってみたいと心底魅了されたことは、今でも忘れられない記憶となっている。

さて今回は、嫁さんを伴ってちょっと高級なツアーに参加し、９名という少人数で回れるので楽しみである。

オランダの国名ネーデルランドは“低い土地”という意味で、国土の四分の一が海抜０m以下ということである。“世界は神が造ったが、オランダだけは人が造った”という言葉に表されるように、風車による排水（風車は粉引きだけでなく、いろいろな用途があるそうだ）によって、水をコントロールしてきたオランダ人の知恵やねばり強さが、現在の繁栄につながってきている。何よりオランダといえば、まず思い浮かぶのは風車とチューリップ、そしてゴッホやレンブラント、フェルメールといった芸術である。また、17 世紀に世界初の投機バブルとなったチューリップの球根バブルは 99%以上もの大暴落をしたという話も、なんだか現代と似たような滑稽なものであり、1986～1991 年の不動産バブルや 1990 年代末には１千万もするオオクワガタが登場したように、21 世紀においても単純に笑えないことであろう。

様々な思いを胸に、２回目のオランダ・ベルギー旅行の始まり始まり～。

８月 11 日（日）晴れ

KL862 便にて成田空港をほぼ定刻（12：35）に出発した。ロシア上空を飛べないので北極回りとなって余分に時間がかかってしまうが、機内では『デューン　砂の惑星』の１と２を観て時間をつぶした。専門用語？が多くて内容がよく把握できないのと、以前（昭和の『砂の惑星』）の方が砂虫の迫力があったように思われた。

さぁ出発だぁ～

ベーリング海峡を抜けて

グリーンランド上空

予定の 19：15 にアムステルダム・スキポール空港に到着となり、20 時に迎えのバスに乗り込んだ。現地ガイドは“備えあれば憂いなし”と話し始めた S さん。奄美大島で生まれて兵庫県に住んでいたという彼女のはっきりした顔立ちは、（僕も時々言われるけど）確かに奄美の血筋を思わせた…僕には奄美の血は入ってないけどね(笑)

ここにきて、アムステルダムは猛暑となり、朝は 17℃ほどだが、夕方４時、5 時、６時になると体感温度が 35℃にもなり、明日は今季最高になるということである。北緯 52～53 度なのに凄まじいなぁと思ったけど、日本ほど湿気がなくて爽やかで、日陰に入ると No Problem であった。

緯度が高いことで日没は 21 時過ぎとなり、なかなか暗くならず、夏にヨーロパに来ることのメリットが強く感じられた。

ホテル・コンサバトリウムは市の中心部にあって格調高い素敵なホテルであった。夕食はついていなかったが、特に空腹を感じなかったので、近くのスーパーとかに買い出しに行かず、明日からの観光に備えた。

オランダ最初の１枚～車中より

ホテルコンサバトリウム

部屋からの夕焼けは美しい

8 月 12 日（月）晴れ

朝食前にホテル近くを散策してみると、すぐ近くに荘厳なタイルと、丸柱が“バスタブ”のように見える市立美術館や、ちょっと先には国立美術館を目にすることができた。以前は、その辺りに冬はスケート場になるという涼しげな池があったのだが、水漏れがあったとかで工事中となっていて残念だった。

“山が無いオランダでは石が採掘できず高価になってしまうので、運河を作った際に採れた土からレンガを造ったことから、レンガ造りの建物や道が多いので、ぜひともレンガたちのささやきを聴いて楽しんでください”という S さんの話から、アムステルダム観光がスタートした。

まずはゴッホ博物館からの鑑賞となったが、ゴッホの弟のテオの遺族の希望によって、作品が散逸しないよう、テオの元にあった作品がまとめて公開されている。ゴッホは 27 歳で油絵を描き始め 1873 年に 36 歳で夭折したが、その間に描かれた 200 点以上の作品がここに集められている。画家のスタートのオ

ランダ時代からパリ～アルル～サン・レミ、そして終焉の地となったオーベル・シュル・オワーズと、年代・時系列で展示されているので、その移り変わりが良く分かる。油絵の他にもスケッチや収集した浮世絵、さらには、ゴッホの手紙等々も展示されている。この美術館は 1973 年に建てられたが、1999 年に、かの黒川紀章設計によって新館が建て増しされたという。

彼の初期の作品である「ジャガイモを食べる人々」の暗くて貧しい農民のリアルな食卓の表現は感慨深かった。牧師である父親との葛藤のせいもあるのか、オランダ時代の作品は暗いものが多い。続いては「火の付いたタバコをくわえた骸骨」。当時の芸術学校のアカデミズム教育への風刺として描かれたものだという。

「ジャガイモを食べる人々」

「火の付いたタバコをくわえた骸骨」

浮世絵、特に歌川広重の影響を受けてゴッホの作品が大きく変化していく

次に、パリ時代の、印象派の影響を受けて明るい感じの絵画が目に入ったが、歌川広重の模写「花咲く梅の木」や浮世絵の模写等、この時代の作品はジャポニズムの影響を多大に受け、ゴッホの転換期であることが再確認できた。また、広重の雨の描き方が‘線’であることにゴッホが大きな影響を受けたという説明が S さんよりあって、思わず納得してしまった。

陽光の南仏プロヴァンスに移ってからのゴッホの作品は明るく力強いタッチが多く、彼の心境の変化が如実に感じられる。そして代表作と呼ばれるものが多く描かれているのがアルル時代。この地で描かれた「ひまわり」は 7 点作成され、そのうち 6 点が現存ということである。このうちの一つは新宿の SOMPO

美術館にあり、以前観にいったことが思い出された。「ヒマワリ」の輪郭をハッキリ描くのは浮世絵の影響であるという。

また、「花咲くアーモンドの木の枝」は、弟テオの息子の誕生を祝って甥にプレゼントするために作成したという。花の色のピンクや赤の‘差し’が素晴らしいし、背景の青が鮮やかで印象的だが、先に花や枝を描いてから背景を描くということである(凄)。

「ひまわり」　「花咲くアーモンドの木」　「収穫」　「サント・マリーの海の風景」

ゴッホはオランダからパリ、南仏（アルルと入院したサン・レミ）そして終焉のオーベル・シュル・オワーズと、滞在した場所によって大きく作風が異なっていることが窺われた。

ゴーギャンの椅子　ゴッホの手紙を保管した書棚　弟の嫁ヨハンナ　ゴッホとテオ

「ゴーギャンの椅子」の椅子に置かれた２本のロウソクは、現実と空想・幻想を表していると説明があったが、彼との共同生活を営むも、不和になって彼から“自画像の耳の形がおかしい”と指摘されるや、自らの左耳朶を切り取って女友達に送り付ける等の奇行が出始めたという。そして、自らサン・レミの精神病院に入院することとなった。

それにしても、手紙魔のゴッホの手紙をしっかりと保存した弟の嫁ヨハンナは“いい仕事”をしたし、ゴーギャンにお金を渡して兄の滞在先のアルルに行くようお願いした弟テオと、素晴らしい弟夫妻に恵まれたことが、ゴッホの生涯において、まさしく宝物であったと言えよう。

「ひまわりを描くゴーギャン」　「黄色い家」　遺作となった「木と根の幹」

最後は晩年を過ごしたオーベル・シュル・オワーズに辿り着く。20 年近く前になるが、実際に訪れて、ゴッホが最後に過ごした家（宿屋）や、描いた教会、麦畑そして弟テオとともに眠る墓を見たが、寂寥感が漂ってくる光景であったことが思い出された。絵画として鑑賞すると、ゴッホの自然界に対する姿勢や慶びが感じられる力強いタッチが伝わってきた。

「麦畑」

「カラスのいる麦畑」

「自画像」とその裏側

久々のゴッホ美術館は、前回よりちょっと心の余裕をもって回れたような気がするが、素晴らしい作品たちと再会できて、懐かしさで心が癒される思いであった。

続いて、徒歩にて国立美術館に向かったが、歴史を感じさせる王宮のような佇まいの美術館は、アムステルダム中央駅舎と同様カイパースによる設計で、館内には中世から 20 世紀までの工芸品や 17 世紀の絵画を中心に展示されているという。初めに S さんが美術館の２階相当に当たる天井の黒い部分を指さして、“これを覚えておいてください”との話があった。

オシャレな国立美術館

黒い部分！？

レンブラントの「夜景」

荘厳な内部と、日本から輸出されたマゼランチェスト

前回、国立美術館は改装中であったため、主だった作品だけしか展示されていなかったので、今回はちょっと楽しみにしていた。中に入ると壁の装飾や見

事なステンドグラスに、まずは圧倒されてしまった。

17 世紀にマゼラン枢機卿が二束三文で購入した日本製の金漆で装飾された杉製のチェストは、今では 10 億もの値打ちが付けられているということで、源氏物語や石山寺を模った素晴らしい装飾が施されている。

おかしな恰好の３人(笑)

「牛乳を注ぐ女」

「青衣の女」

まずは嫁さんが‘おかしな３人’を撮っていた(笑)　フェルメールのコーナーはとても混雑していたけれど、ウルトラマリンの濃くて澄んだ奥行きのある彩りに魅了された。

「恋文」

「小径」

「スケーターのいる冬景色」

手前のタイルが協調されている「恋文」は、‘楽器を弾く＝恋を奏でる’というようなイメージを醸し出すが、僅かに微笑みを浮かべる召使が‘私は何でも知っているんですよ’という感じで、女主人には不安と恐れが感じられるということである。「小径」はデルフトの街並みを描き、フェルメールが描いた３点の風景画の一つであると説明された（１点は不明ということである)。

「1648 年の条約締結の祝宴」

「夜景」は修復中でガラス越しの鑑賞に

アーフェルカンプの「スケーターのいる冬景色」やフォルストの「1648 年の条約締結の祝宴」等を鑑賞したが、後者は前回の時に観たのを覚えていた。オランダとスペインとの間の 80 年戦争において 1609 年に休戦協定が結ばれ、1648 年のウェストファリア条約によって南部 10 州はスペインに従い、北部 7 州がスペインからの独立を果たしたということである。

そして、いよいよレンブラントの「夜警」となった。AI によって修復されているということで、ガラス越しとなってしまったけれども、以前に比べて絵が明るくなっているように感じられた。絵の表面に塗られた劣化したニスが上手く剥がされているのだろう。アムステルダムの自警団は敵がいなくなったことで社交集団となってしまったが、それを描いたということである。

中央後ろのヘルメットを被っている男の肩越しにベレー帽を被ってチラッと顔が出ているのがレンブラント自身、そして左下の少女の腰につるされている鶏は爪が火縄銃（ピストルの爪）を表していて、妻サスキアがモデルではないかと言われている。

そして、この美術館に何か災難が起こった際に「夜景」を持ち出す避難路が、入館前に S さんが話してくれた天井の黒い部分ということであり。オランダ一番の名画の扱い方に思わず“ガッテン”してしまった。

「布地商組合の見本調査官たち」

｛ドールハウス｝も素晴らしい！

「布地商組合の見本調査官たち」は事務所の暖炉の上に掛けて高い位置において鑑賞するように描かれたということである。

美しいデルフト焼きが並べられていた

絵画に続いてドールハウスや、美しいデルフト焼きの作品が展示されている

コーナーを巡ったが、巨大な塔のようなものは花瓶で、角々にチューリップを刺して楽しむという。

２つの美術館を鑑賞後に、運河沿いの SERRE というレストランで昼食となった。テラス席でのランチは、日差しのわりには湿気が少ないために心地よくいただくことができた。

心地よい風に吹かれ、メインはやわらかいお肉でした　　コーヒーと甘いデザートに満悦

食後は専用車にてアムステルダム及びその近郊の観光ということで、ガイドの S さんを伴った我々のベンツは、約 15 ㌔北にある風車の村ザーンセ・スカンスへ。

ヤープさんの運転で出発　風車が回っている！　飛び込んで泳ぎ出す人が！　　風車内部

前回はキンデルダイクの風車群だったが、今回のザーンス・スカンスはアムステルダムに近いこともあって、超オーバーツーリズムであった。北海から吹き付ける風を利用して回る風車は 19 世紀にはオランダ全体で約 9,000 基もあったそうで、粉ひきや石をつぶしたり、からしの粉をひいたりと、種々に使用されてきたという。しかし一番は排水用として低地のオランダの国造りに貢献してきたことで、現在でも 950 基が健在ということである。

風車小屋からの景色は平坦な草地と川（運河？）が見渡せた

草地には牛が放牧されていて、周囲にはチーズ博物館兼ショップをはじめと

する土産物店があり、どこも混雑していた。

さて、ヤープさんが美しい景色を見せてくれるというので、10 分ほど走ってブルック・イン・ウォーターランドという小さな村に連れて行ってくれた。キレイな家々や草木と水が調和して、まるで絵はがきのように美しくて静かな超穴場スポット！

Sさんを中心に　　教会内のセルフ喫茶室でブレイク

水との調和が素敵な村　お薦めです！

教会内にある喫茶室でヤープさんを含めて４人でブレイクしたが、天候にも恵まれたこともあって、水と緑と碧い空に映えるこの村は超素敵で、来てよかったぁ～と心に沁みるひと時を過ごせた。そうそう、ヤープさんて、『荒野の七人』や『大脱走』に出演したジェームズ・コバーンにちょっと似た、渋い感じのドライバーだった。

車で市内に戻り、アンネの家に向かった。以前は長い列を並べば入場できたのだが、現在は事前にネット予約が必要ということを聞き、オランダに来てから試みるも満杯で、もしやキャンセル等があれば…と思ったけれど、結局今回は入場できず外観のみの観光となった。

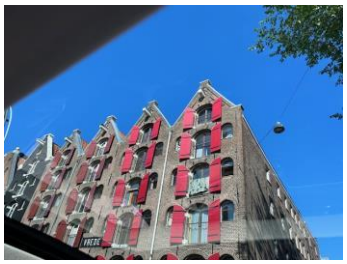
前回、昼食にパンケーキを食べてからアンネの家に行ったなぁ、と話すと、私の旅行記を熟読している S さんが“鹿島さんは、パンケーキ・ベーカリーからこちらの道を通って来たんですよ～”と鋭く指摘され、思わず‘このガイドさん、只者ではない！！’と心の中でつぶやいてしまったぁ(笑)　そうそう、あのパンケーキ、ハムがいっぱい入っていて、そこにシロップを掛けて食べたけど、しょっぱいやら甘いやらで複雑な味だったなぁ。

アンネの家は外観のみで中には入れなかった　　前回食べた巨大パンケーキの写真

以前に比べ、アンナの家の外観は少しキレイになっているように思われた。

アンネの像やホモモニュメント～迫害を受けた同性愛者を追悼するために作られた三角形のピンクの石～等を見た後に、ヤープさんが　ちょっといい処を案内するということで、アムステルダムの下町のようなところ（ヨルダン地区を抜けて）に連れて行ってくれた。

アンネの像　　ホモモニュメント



ヤープさん、ガイドのＳさんとのドライブは、18時にホテル到着となった

夕食後に近くの公園を散策してホテルに戻ると、夕焼けがキレイだった

19：45よりホテル近くのSEA FOOD BARというレストランにて夕食。食後は、まだまだ明るい街中にある公園を散策してから部屋に戻ると、昨日同様に

美しいサンセットが締めくくってくれた。

８月 13 日（火）　晴れ

素敵な朝食を済ませて、9 時に出発し、バスは一路ハーグを目指した。

美

右手に 1928 年のアムステルダム五輪会場を見ながら進んで行った。織田幹夫が三段跳びで日本人初の金ダリストになったその大会では、人見絹枝が 800m陸上で日本人女性初のメダリスト（銀メダル）となっている。人見絹枝といえば、７月に放映されたＥテレ『偉人の年収』で取り上げられ、アスリートと新聞記者の二刀流で活躍し、女子スポーツの普及に努めて女性に無限の可能性があることを示したが、肺炎を患って 24 歳であっけなく夭折されてしまったとの生涯が紹介されていた。因みに、19 歳の時の年収は現在換算で 250 万円、没する直前は 500 万円ということであった。

スキポール空港の横を進むバスでは、S さんからオランダについての詳細な説明が行われた。

…オランダが歴史に登場してきたのは 17 世紀になってからのこと。特に東インド会社の設立によりアジアに大きな影響を与えたこと。王侯貴族と宗教が主流であったこの国の体制に反発したプロテスタントの人々が市民国家としてオランダを立ち上げたこと等から入って…、面積は九州とほぼ同じくらいで、人口 1800 万人弱、GDP は 16~18 位くらいを推移している。平均年収は 36,000～40,000 ユーロ（円に換算すると 500～600 万円）、付加価値税は内税で 21%、国民負担率は４割越えで、北欧ほどの重税感はなく‘そこそこ、ほどほど’っていう感じである…。

街中ではマリファナ、大麻等のソフトドラッグは 18 歳以上であれば１日３g までは普通に買うことができる（コカインや覚せい剤といったものは取り締まっているが）。有名な飾り窓については、禁止して地下に潜ってしまうより表に出してしまった方がいい、という考えで過度の営業活動や PR をしない限り OK と、風俗に関して現実的な対応をしていること。

安楽死を世界に先駆けて 2002 年に立法化したオランダでは、毎年 9,000 人近くが安楽死を選択し、年々増えつつあるという。

また、代理母、里親制度、LGBTQ、移民等々について積極的な取り組みをし

ており、他の国がタブー視するような案件に積極的に対応しているということが、この国の特徴とも言える。確かに、アムステルダム市長自ら先頭に立つゲイのパレードも行われるなど、同性愛者を受給する国でアイスランド、スウェーデンについてオランダは３位にランクされている。

さらに、政治・外交都市ハーグと、ブルジョアの住むアムステルダムの対立等についても、現在のオランダ王家のオラニエ・ナッソー家がフランス革命の影響を受けて追放され、その後に復権されるという興味深い話も聞くことができた。

オランダは新しもの好きで、何でも最初にやりたがる国であるが、これは大国でないことで失敗しても方向転換しやすいというメリットもあってこその対応である。とにかく“世界の中の先駆けであれ！”というオランダの次の一手が見ものである。

美しい市内を抜け、空港の脇を進んでオランダらしい平坦な風景が続くと、１時間ほどでハーグ、マウリッツハイス美術館に到着となった。

美術館の正面像と入口　　毎晩、当美術館を見回るというネズミのマウリッツの巣が(笑)

久しぶりに『真珠の耳飾りの少女』に会えるんだなぁ、という感慨を胸に美術鑑賞となった。

「キリストの哀悼」→ヘームの「花を生けた花瓶」→ルーベンスの「聖母被昇天の下絵」→だまし絵のマウリッツ・マウス→ルーベンスとブリューゲルの合作「楽園のアダムとイブ」→レンブラントの自画像とデビュー作と言われる「テュルプ博士の解剖学講義」（この絵に描かれた左端の男は、後でお金を積んで加えてもらったとか）→ヤン・ステーン「親が歌えば子供が笛吹く」と「牡

蠣を食べる少女」→フェルメールが師と仰いだカレル・ファブリティウス「ゴシキヒワ」（小鳥の絵）と鑑賞し、そしてお待ちかねのフェルメールに辿り着いた。

イエスの宗教画　花には毛虫や蝶なども　レンブラントの下絵はアントワープによって完成！
ルーベンスが馬とヘビを描いた後にブリューゲルが仕上げた

「自画像」　　「デュプレ博士の解剖学講義」は名声を確立した作品と言われる
「親が歌えば子供が笛吹く」に描かれている犬は、数少ない種類のコーイケンホンディエで、大谷のデコピンの祖先ということである！？

「牡蠣を食べる少女」　　「ゴシキヒワ」　　「ダイアナとニンフたち」

まずは「デルフトの眺望」から。光の詩人と呼ばれるフェルメールの、光を最大に発揮した作品であり、夏の朝の７時 10 分ころを描いたものと言われ、にわか雨が降った後の初夏の光を表しているようだ。オランダは山が無いので雲の動きが早く、風景画にも雲の動きや太陽の光が協調されているように感じられる。また、手前の２人の女性のうちの一人が、かの「牛乳を注ぐ女」であると言われているそうだ。よく見ると衣装が合致している。この絵は 1660 年の作品であるが、1654 年にデルフトで火薬庫の爆発事件が起き、街の４分の１が破壊

され多くの命が失われたという。フェルメールの師匠ファブリデウスも亡くなってしまい、その作品もほとんどが消失してしまったということだ。このような背景から、フェルメールは故郷の穏やかな風景、ありふれた日常をいとおしむように、この作品を描いたのかもしれない。
→「ダイアナとニンフたち」は最初期の歴史画の一つということである。

「デルフトの眺望」

「真珠の耳飾りの少女」

お土産で買ったマグネット(笑)

いよいよ本美術館の至宝「真珠の耳飾りの少女」との 16 年ぶりのご対面～。1665 年ころに描かれた同作品のモデルは、娘のマリア？召使のグリエット？等々様々な推測がなされているが、彼女の美しい謎の微笑みは、S さんの解説によると“表情を作る 1 秒前の時間を”描いているということで、将にミステリアスであると言えよう。ターバンの鮮やかな青色（ラピスラズリ～ウルトラマリン）が、少女の顔を悲しげにしているようにも感じられた。

「真珠の耳飾りのネコ」を売店で購入した嫁さんは、とても気に入って“今回の最高のお土産！！”と喜んでいる～♪。

６年前は王立美術館、ゴッホ美術館、そしてハーグにあるマウリッツハイツ美術館はすべて撮影禁止であったけれども、今回フラッシュを焚かなければ OK ということで、‘規制緩和’が行われたようでちょっとビックリした。前回の旅行記を作成するに当たって、どうしても画像が欲しかったので、たまたま某雑誌で両美術館の特集があって種々の作品が掲載されていたので、そこからスキャンして掲載したことを、ふと思い出した。当時はスマホもなくて、デジカメで撮影した画像を使っていたしなぁ。

マウリッツハイスを出ると左手に、ホフファイファーの池越しにビネンホフ（国会議事堂や総理府などの官庁群）が見渡せた。現在、建物だけで内部は工事中で、種々の組織は仮移転しているとのことだが、首相官邸だけがなかなか退出せず、最近ようやく出て行ったとのこと。

そのまま徒歩で昼食のレストランに向かったが、途中ハーグの市章であるコウノトリのオブジェを見ることができた。

ビネンホフとハーグの市章のコウノトリ

ハーグには 70 ほどの公園があるというが、緑豊かな素敵な処でランチ

市内を抜けて、フェルメールの故郷である古都デルフトを目指して出発となった。昼寝タイムの時間だけど、ガイドさんの詳細な説明にはしっかりと耳を傾けていると、風車で水抜きをした後に葦を植え込んだり、海に近いところでは塩抜き後に生命力の強い菜種を植え込んで土地の熟成を図ったりしてから木を植えて入植者を募るという興味深い話を聞くことができた。また、オランダには内陸水路が 6 千㌔あって、運河水路を固めるために木の根を用いる等の自然の力を利用しているという説明を聞いているうちに、バスはデルフトの街に進んでいった。

フェルメールの故郷であるデルフトは前回訪れていないので、とても楽しみにしていた。まずは地盤沈下で少し傾いたという旧教会が目に入った。1240 年頃から建造されフェルメールも眠っているという。

旧教会には顕微鏡の発明者であるレーウェンフックのお墓もあるという。もともとは呉服・洋裁販売を手掛ける商人であった彼は、趣味として顕微鏡の作製に携わる素人学者であったが、雨水や井戸水のなかに原生動物を発見したり、ヒトや動物の体液や排泄物等を観察したりして、様々な微生物が生物の体内に存在することを明らかにしている。90 歳で逝去するまでデルフトを出ることがなく、当時の医学界で使用されたラテン語ができず（オランダ語しかできなかった）レーウェンフックの研究生活は学問競争に身を削ることもなく、将に孤高の学者であったというよう。

左手に折れると、フェルメールが洗礼を受けたという上部が黒ずんだ新教会が見えてきた。新教会といっても 15 世紀に建てられ、その高さはオランダで 2 番目に高いとのこと。スペイン支配下で圧政に苦しむ人々を率いて反乱を指揮し、後のオランダ独立への足掛かりを作ったウィレム 1 世が眠っているという。新教会とマルクト広場で向かい合っているのはルネッサンス様式の市庁舎。
1620 年の建設というから 400 年以上の歴史となるが、現在でも一部が現役で使用されているという。

新教会の上部は黒ずんでいるのは酸性雨の影響とか　荘厳な市庁舎　　フェルメールの生家

フェルメールの好んだラピスラズリとデルフト焼きのブルー　　ブルーハート・オブ・デルフト

「デルフトの眺望」が描かれた町に足を踏み入れ、フェルメールの見た景色を目の当たりにして、何かホッとする気持ちになれた。

トゥクトゥクのような小さな乗り物で町を出て観光終了

とりあえず、今回のオランダ・ベルギー旅行に関しては、オランダ編として以上を記載しておきます。偏に、現地ガイドの S さんへのリスペクトとしてであります。

オランダといえば、スペイン・ポルトガルに代わって 16 世紀末よりアジアに進出して、商船リーフデ号が大分に漂着しとことが機縁となり、航海士ヤン・ヨーステンや英国人ウィリアム・アダムス（三浦按針）が家康の外交顧問となって以来、幕末に至るまで長崎の出島にて日蘭貿易が行われていた。

さらに、1602 年にジャカルタに本拠を置くオランダ東インド会社を設立し、300 年にわたってインドネシアを植民地支配して種々の搾取を行ってきた国である。そして ABCD 包囲網によって日本を経済封鎖して大東亜戦争へと導き、戦火を交えると、たった 9 日間で日本に敗れてインドネシアを撤退し、その後、逆襲もできないまま、英豪軍の勝利のおかげで戻ってきて再び植民

地として支配しようと企てた卑怯な国でもある。
日本軍はスカルノをはじめとする民族主義者を開放して彼らと協力体制をとったことで、後にインドネシア独立の機運が高まるだが、そのような因縁……自力で日本に勝てなかったうっぷん、そして何よりも、日本軍の占領下でインドネシアの独立意識が決定的に育っていったことに、オランダ人は復讐心を燃やしたのである。かくして9日間しか戦わず、最も被害の少なかった国が、日本人捕虜を徹底的に虐待して、戦勝国中最も多い236名の日本将兵を死刑に処したのである。
1964年の東京五輪での柔道無差別級で神永がヘーシングに敗れとことも、古い記憶の引き出しの中に収められている。
このように、16年前よりチョッピリ大人の思考を抱きながら、久々のオランダ・ベルギーに思いを馳せて機上の人となった今回の旅行だが、やっぱりオランダ・ベルギーは超素敵でした。ぜひまた、訪れたいものである。
そうそう、春にキューケンホフを訪れて、ぜひともチューリップ畑を見物したい。
　あるツアーの旅行記をアップしたところ旅行会社を通じて、参加者の一人からクレームがついて、泣く泣く破棄した苦い経験があり、それ以来旅行記作成もアップも控えてきたのだが、Sさんの“旅行記楽しみにしてますね～～！”との言葉から、今回の旅のモチベーションが一気に上がっていって、何とか書き上げた次第です。
　Sさんには重ねて深く御礼申し上げます。
ありがとうございました。また会えるといいですね！